

「離婚しても親友。夫とは今の距離感が一番心地よい」

浜松(ゆうゆうの里)

中木好江様(77歳) 平成29年7月 一人入居

夢中になって働いた時代

豊川市生まれの豊橋市育ちです。豊職人の父と母、兄弟5人の私は末っ子。見習いの小僧さんもいて大勢の中で暮らす活発な子供でした。父親が4歳の時に亡くなり、その後は祖父母、母親、兄弟5人の8人家族で暮らしました。商業高校卒業後は信託銀行に就職しました。夫とは図書館で出会い17歳からお付き合いして23歳で結



今でもこうして仲良く食事をします。(真ん中はお孫さん)



ん。そして娘達が育ち、親の務めも一区切りとなった60歳で私たちは離婚したので。

不思議なことに離婚後は、かえって私達の仲は円満になりました。離婚後は籍にとらわれない「パートナー」となり、ふたりで一緒にゴルフに行ったり、トレーニングジムに通ったりしていました。お互いに素直に「ありがとう」と感謝を口にするようになりました。彼が初めて私にお弁当を作ってくれた時は、本当に感動しましたね。現在でもお互いにかけてえのない大切な存在です。

援してくれましたし、私も彼の選択を応援しています。私は自宅を選んだ彼の老後が心配で「自分の老後をしつかり考えてね。娘達に今後の事をちゃんと頼んでおくのよ。」と、何度も念を押しました。彼は自分で娘に老後の手助けを頼み、長女がそれに応えて近くに越して来てくれることになりました。今も折にふれて彼の住む自宅に戻り一緒に過ごします。娘家族が帰省した時は、みんなで食卓を囲みにぎやかです。

これからはちよつと背伸びすれば叶う目標を置いて生きたい

婚。2人の娘に恵まれ、今では3人の孫がいるおばあちゃんです。娘の出産後、信託銀行を退職して専業主婦となりましたが、32歳の時、当時としては全く新しい形態の食材宅配サービス会社に就職。設立間もないので全てが手探りでしたが、新しいことに挑戦するやりがいに目覚め、50歳で退職するまで夢中になって働きました。

離れてわかるお互いの良さ

どんなに忙しくとも、家庭をおろそかにしないよう、夫と娘達の食事は私が全て準備しました。遅くまで帰れない時も、いったん帰宅して夕食の準備を済ませてからまた職場に戻ることも。それでも夫婦の危機はありました。勤めて2年経った頃、夫から「仕事を取るか家庭を取るか」選択を迫られました。どうしても辞めるとは言えず、50歳で退職するまで仕事をやり続けました。悔いはありません

50からの終活。私の選択、夫の選択

終活は退職後の50歳から始めました。在職中から、夫婦二人の将来の生活に備えてお金の運用を始めました。そして70歳になったら夫婦で老人ホームに入ろうと考えていました。しかし夫の考えは違いました。彼は老後も住み慣れた自宅で暮らしたいと考えたのです。二人で話した結果、お互いの考えを尊重し、老後はそれぞれが望む別々の暮らしを選択することに。それでも彼は私の選択を庇

私は「ゆうゆうの里」の明るくて解放的な雰囲気が入りまじった。元気なうちを存分に楽しみたいと思っていたので、元気な入居者が多くサークル活動が盛んだった点も決め手でした。入居後は毎朝、日課にしている自彊術(じきょうじゅつ)を行って体をほぐして一日が始まります。アスレチックジムトレーニングに、サークルは麻雀、グラウンドゴルフ、卓球、カラオケに参加。コロナで里の活動が自粛中の今は、大好きな編み物をして過ごしています。やりたいことをやり尽くしたいという気持ちちは入居前も入居後も変わりません。